

子育て期夫婦の意見の一致と結婚コミットメント — 個性性と関係性の視点から —

伊藤 裕子*・相良 順子**

本研究は、子育て期にある夫婦を対象に、夫婦の意見の一致が夫婦関係においてどのような意味をもち、位置を占めるのか、また、精神的健康に個人としての側面と夫婦としての側面がどう影響するのかを明らかにすることを目的とした。小学生の子どもをもつ男女 821 名（女性 509 名、男性 312 名）に、夫婦の意見の一致、主観的幸福感、アイデンティティ、達成動機、会話時間、夫の家事・育児分担、結婚コミットメントなどが尋ねられた。結果は、夫婦の意見の一致で、子どもの習い事では比較的意見が一致しやすいが、子どもの将来では意見が一致しにくいことが明らかとなった。また、夫婦としての側面ではこれまで同様のジェンダー差がみられたが、男女とも夫婦としての側面より個人としての側面の方が精神的健康に及ぼす影響がはるかに強いことが明らかとなった。今日、子育て期にある女性にあってもアイデンティティの揺れが大きいことがうかがえる。

Key words : 子育て期、夫婦の意見の一致、結婚コミットメント、個性性と関係性

問題と目的

子どもが乳幼児期のうちは夫婦の関係が安定しておらず (Belsky & Kelly, 1994/1995)、第一子が生まれた夫婦の 7 割近くは結婚生活に不満を覚えるようになる (Gottman & Silver, 1999/2007)。日本では、離婚率が最も高いのは結婚 5 年未満の夫婦であることは昔から変わらない (厚生労働省, 2009)。

一方、子どもが児童期になると、多くの場合、夫婦二人の生活から子どもを交えた生活へと結婚生活も落ち着いてくる。しかし、子どもをめぐって習い事や塾の選択などの教育方針、家族のこれからのこととして住いのもち方・あり方の問題、休日の過ごし方など、夫婦で意見を交わし対処し

なければならないことは多く、夫婦の意見の一致は結婚の質を左右する (小泉・菅原・北村, 2001)。

結婚の質を左右するものとしてその筆頭は夫婦のコミュニケーションであり、もちろん愛情がある。その他に夫婦の共同行動も挙げられよう。また、性別役割分業の根強いわが国では、夫婦における家事・育児分担は夫婦関係のあり方を象徴するものと考えられる。

一方、個人の精神的健康に寄与する要因には様々なものが考えられるが、ここでは個人に関わる要因と夫婦に関わる要因を考えてみたい。つまり、結婚している夫婦にとって、個性性と関係性が個人の精神的健康にどの程度寄与しているのか、またそこにジェンダー差はみられるかを明らかにしたい。たとえば、伊藤・相良・池田 (2004)

* 人間学部心理学科

** 聖徳大学

では、既婚者の精神的健康に及ぼす夫婦関係満足度と職場満足度の影響を比較しているが、女性は就業形態のいかんにかかわらず夫婦関係満足度の影響が大きい、男性では職場満足度の影響が強かった。男性の場合、結婚の質より結婚していることそのものが重要になってくるのである(稲葉, 2002; 2004; 伊藤, 2008; 宇都宮, 2014)。

また、結婚に関わる要因のうちで、質に関わる意見の一致が夫婦関係満足度や愛情とどのような関連をもち、精神的健康に寄与するのか、特に夫婦関係の要因の中での位置づけを明らかにしたい。

本研究では、これら夫婦としての側面と個人としての側面が精神的健康にどの程度寄与しているか、また、夫婦としての側面の中で夫婦の意見の一致がどのような位置を占めているのか、さらに、夫婦としての側面のうち、個別の、すなわち、夫婦の意見の一致や会話など個別の側面と、結婚コミットメントとして表出される側面でどう異なるかを明らかにしていきたい。

方法

調査対象と方法

調査対象者は小学生の子どもをもつ子育て期の夫婦で、調査方法は関東近郊の小学校2校を通じて1～6年の全児童に調査票を配布し、留め置き期間の後、児童を通じ学校にて回収した。夫婦間の回答の独立を保つため、妻票・夫票を別々の封筒に入れ、調査用紙の色を違え、回答後すぐ封のできるシール付きの封筒で、2通1組として配布した(1,000組)。なお、配偶者がいない場合は本人のみの回答でよいことを記した。有効回答は女性509名、男性312名、計821名で(有効回答率41.1%)、調査は2015年6月に実施された。

倫理的配慮として、調査への協力は任意であり、回答したくない項目には回答しなくてよいこと、全ての回答は統計的に処理されるので個人の回答が特定されることはないことを依頼状に明記した。なお、調査票は対象校の校長の許可を経て実施された。

対象者の属性

対象者のおもな属性は以下の通りである。年齢は20～50代で、30～40代が95.0%を占め、平均年齢は男性41.7歳($SD=5.2$)、女性40.1歳($SD=4.8$)、平均結婚年数は男性13.0年($SD=4.0$)、女性13.1年($SD=4.0$)であった。配偶関係は、有配偶で同居が91.8%、別居1.1%、単身赴任2.3%、無配偶で死別0.4%、離別3.9%、独身0.5%であった。学歴は、男性で最も多いのが大卒で43.8%、次いで高卒で33.9%、女性で最も多いのは短大・専門卒で47.7%、次いで高卒34.0%であった。就業形態は、男性で最も多いのは常用雇用の76.2%、次いで経営者・役員8.9%と自営業・自由業9.3%が同程度であった。女性で最も多いのはパート・アルバイトの44.6%、次いで専業主婦34.0%、常用雇用は12.2%であった。子ども数は二人が最も多く52.4%、三人が23.1%、一人が20.3%であった。

なお、結婚コミットメントを含む配偶者との関係について尋ねている項目では、現在配偶者がいる者のみを分析対象とした。

分析の測度

取り上げた測度は、目的変数として主観的幸福感、説明変数として個人的側面としては性役割観、アイデンティティ、達成動機、夫婦としての側面としては会話時間、夫の家事・育児分担、意見の一致、そして結婚コミットメントの4因子である。デモグラフィックな変数として年齢、性別、学歴、収入満足度、身体的健康を取り上げた。なお、分析では取り上げないが、関連する変数として夫婦の愛情、夫婦関係満足度、離婚の意思も変数として追加した。

主観的幸福感 精神的健康の測度として、伊藤・相良・池田・川浦(2003)が作成した主観的幸福感尺度12項目を使用した。この尺度は高い信頼性($\alpha=.86$)と妥当性が確保されており、項目数も少なく、単次元で結果を表すことができる。評定は「4:非常に〇〇である」から「1:全く〇〇でない」の4件法で、回答の選択肢は質問ごとに異なる。

意見の一致 子育て期には、子どもをめぐる教育方針やしつけ、住居所有の是非や休日の過ごし

方などさまざまな側面で夫婦の意見が交わされる。夫婦の意見の一致は夫婦関係の測度として取り上げられ、愛情や夫婦関係満足度などとの関連が高い。小泉他（2001）などを参考に6項目を作成した。評定は「5：とても当てはまる」から「1：全く当てはまらない」の5件法であった。

結婚コミットメント 伊藤・相良（2015）が中高年期夫婦を対象に作成した尺度（人格的コミットメント、諦め・機能的コミットメント、規範的コミットメント）をもとに、子どもの存在を媒介とした夫婦のコミットメント（上記3因子に子の存在コミットメントの計4因子）計28項目で、妥当性も得られている（伊藤・相良，2017）。 α 係数は.82～.93であった。評定は「5：とても当てはまる」から「1：全く当てはまらない」の5件法であった。

アイデンティティ Eriksonの漸成発達図式の青年期の課題であるが、広く中年期にも用いられている。ここでは中西・佐方（1993）のEPSIのうち下位尺度である同一性7項目を用いた。 α 係数は.80であった。評定は「5：とても当てはまる」から「1：全く当てはまらない」の5件法であった。

達成動機 堀野・森（1991）による達成動機尺度を構成する2因子の一つである自己充實的達成動機13項目のうち負荷量の低い1項目を除いた12項目を用い、相良・伊藤（2014）が中高年期夫婦を対象に行った調査で天井効果のみられた1項目を除き、11項目を使用した。 α 係数は.91で、評定は「5：とても当てはまる」から「1：全く当てはまらない」の5件法であった。

性役割観 男女の役割についての規範意識を尋ねた。伝統的・規範的な性役割について問う4項目で（例：男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである）、評定は「4：そう思う」から「1：そう思わない」の4件法で、 α 係数は.76（伊藤・相良，2015）であった。

会話時間 夫婦の1日（平日）あたりのおよその会話時間を尋ねた。「1：ほとんどない」、「2：1日30分以下」、「3：1日30分～1時間」、「4：1日1～2時間」、「5：1日2時間以上」の5件法であった。

家事・育児の分担 家事と育児を妻と夫がどの

ような割合で分担しているか、それぞれについて全体を10としたとき、自分と配偶者の分担割合を尋ねた。なお、ここでは夫の割合だけを取り上げた。

夫婦の愛情 伊藤・相良（2012b）により作成された16項目から成る夫婦の愛情次元尺度を用いた（例：配偶者は私を理解してくれる）。これはすでに高い信頼性（ $\alpha=.94$ ）と妥当性が確保されている。評定は「4：いつもそうだ」から「1：いつもそうではない」の4件法であった。

夫婦関係満足度 結婚・夫婦関係に対する総合的な評価として、単一指標による夫婦関係満足度を尋ねた（ご夫婦の関係について、現在の満足度を10点満点で評価して下さい）。回答は「10：たいへん満足している」から「1：全く満足していない」の間の当てはまる数字に○をつけるものである。評定を10段階としたのは、単一指標のため測定の精度を高めるためである。

離婚の意思 離婚をめぐる状況は男性と女性で背景が異なるため質問内容は異なる。男性では、「あなたは配偶者との離婚について考えたことがありますか」で、評定は「1：離婚など考えたことはない」「2：過去に考えたことはあるが、今はない」「3：現在でもそういう選択肢はあり得る」「4：考えており、できれば離婚したい」の4件法、女性では、「結婚生活について、もし経済的に可能なら『離婚したい』と思いますか」で、評定は「1：全く思わない」「2：あまり思わない」「3：そういう選択肢もあり得る」「4：近い将来したい」「5：今すぐにでもしたい」の5件法であった。

結果

1. 夫婦の意見の一致基礎統計量とt検定結果

夫婦の意見の一致について基礎統計量を算出し、男性と女性でt検定を行った（Table1）。項目内容はTable3にみるとおりだが、項目2以外は夫婦で意見が「一致しない」という内容なので値は低い。男性と女性ではどの項目にも有意な差はみられない。いずれの項目もSDは大きく、男性と女性で平均値では差がみられないが、意見の個人差が大きいことを表している。

Table1

夫婦の意見の一致	男女別基礎統計量と t 検定結果			
	男性	女性	t 値	df
1. 塾の選択	2.60 (0.99)	2.64 (1.08)	0.59	648.14
2. 子どもの将来(一致)	3.52 (0.98)	3.44 (1.00)	0.31	742
3. 休日の過ごし方	2.63 (0.99)	2.54 (1.04)	1.16	742
4. 子どもの習い事	2.39 (0.94)	2.34 (1.04)	0.72	742
5. 子どものしつけ	2.53 (0.97)	2.57 (1.04)	0.44	742
6. 住まいのもち方	2.36 (0.97)	2.43 (1.07)	0.97	652.53

次に Table2 は、男性と女性がそれぞれに夫婦で意見が一致するか否かの他の項目との相関をみたものである。これをみると、項目間の相関で他の項目との相関が低いのが、男女とも「子どもの将来」で、一方、他の項目と相関が高いのが男女とも「子どもの習い事」であった。

2. 夫婦の意見の一致尺度構成

夫婦の意見の一致 6 項目について主成分分析により尺度構成を行った。Table3 にみるように、項目 2 以外は第 1 主成分に高く負荷し、寄与率も 55.95% と高く、項目 2 を除いた 5 項目の α 係数は .86 と十分に高い値だった。

以降は夫婦の意見の一致として、5 項目の評定値を逆転して単純加算し、項目数で除した値を用いた。

Table3

意見の一致	主成分分析結果	
	負荷量	共通性
1. 子どもの塾の選択など教育方針において配偶者とずれがある	.772	.596
2. 子どもの将来のことについて期待することは夫婦で一致している	-.483	.233
3. 休日をどう過ごすかについて配偶者と意見があわないことが多い	.745	.556
4. 子どもの習い事について配偶者と意見が一致しないことが多い	.850	.723
5. 子どものしつけについて配偶者と意見が合わないことが多い	.814	.663
6. 住まいのもち方・あり方について配偶者と意見が一致しない	.766	.587
固有値	3.357	
寄与率 (%)	55.948	

3. 主観的幸福感の階層的重回帰分析

精神的健康の測度として主観的幸福感を用いたが、これが個人としての側面と夫婦としての側面にどの程度影響されるのか、また、夫婦としての側面でも、個別の夫婦関係と関係性の質をとらえる結婚コミットメントでどう異なるかを検討した。主観的幸福感を目的変数に、説明変数には、step1 でまずデモグラフィックな統制変数を投入し、次に step2 で個人としての側面に関わる変数を、step3 で夫婦関係に関わる個別の側面を、step4 で同じく夫婦関係に関わる側面でも結婚コミットメントを投入し、重相関係数の二乗 (R^2) である説明率の増分から変数の適切性をみた。また、男女でどう異なるのかも重要な視点であった。結果は、Table4 および Table5 に示した。

Table2 夫婦の意見の一致 項目間相関

	1. 塾の選択	2. 子どもの将来	3. 休日の過ごし方	4. 子どもの習い事	5. 子どものしつけ	6. 住まいのもち方
1. 塾の選択	—	-.289 ***	.359 ***	.663 ***	.455 ***	.440 ***
2. 子どもの将来 (一致)	-.312 ***	—	-.241 ***	-.297 ***	-.195 **	-.283 ***
3. 休日の過ごし方	.495 ***	-.276 ***	—	.510 ***	.473 ***	.450 ***
4. 子どもの習い事	.676 ***	-.322 ***	.580 ***	—	.625 ***	.566 ***
5. 子どものしつけ	.538 ***	-.329 ***	.583 ***	.623 ***	—	.594 ***
6. 住まいのもち方	.480 ***	-.289 ***	.510 ***	.530 ***	.595 ***	—

** $p < .01$, *** $p < .001$

上段右男性, 下段左イタリック体女性

まず step1 をみると、男女とも関係する変数は全く変わらず、第一に収入満足度、第二に自身の身体的健康が高い値で主観的幸福感に影響し、学歴は弱い男女とも寄与していた。収入と健康で精神的健康の分散の2割を説明している。

次に step2 では、デモグラフィックな変数を統制した上で、個人としての側面が精神的健康に影響する様子を見た。すると男性はもちろんのこと、女性においてもアイデンティティが非常に大きな値で精神的健康に影響していた。次いで、達成動機、ここでは自己充實的達成動機だが、むしろ女性の方が強く影響していた。一方、男性では、伝統的な性別役割観が個人の精神的健康にはプラスに作用していた。これは女性ではみられないことであった。

step3 では、個人としての側面はそのまま投入した上で、夫婦としての側面に関わる変数を投入した。なお、ここで愛情、夫婦関係満足度、さらに離婚の意思は夫婦関係に関わる重要な変数だが、これらは他の夫婦関係の変数と相関が高く、これらの変数を投入することで他の変数の変動が吸収されてしまうので、敢えてこれらの変数は外した。Appendix にこれらの変数と他の変数との相関を示した。

step3 では、男性と女性の結果は様相を異にする。男性では夫婦のコミュニケーションである会話時間は夫婦の変数としては重要だが、女性は有意ではない。一方、夫婦の意見の一致は女性では夫婦関係の変数の中では重要な位置を占めるが、男性ではその影響力が下がる。なお、精神的健康に対して有意ではないが、夫の家事分担・育児分担は、女性では愛情や夫婦関係満足度、離婚願望と高く関連するが ($r=.251 \sim .436$)、男性では関連しない ($r=.023 \sim .162$) (Appendix 参照)。このように夫婦に関する側面は男性と女性では大きく異なる。

step4 では、先の夫婦に関する個別の側面の代わりに結婚コミットメントを投入した。男女とも結果は同様に、人格的コミットメントのみが精神的健康に影響し、特に男性でその影響力は高かった。

最後に、説明率 (R^2) の変化をみてみたい。step1 から step2 に、すなわちデモグラフィックな統制変数を投入した後に個人としての変数を投入したわけだが、個人変数としてのアイデンティティが非常に大きな影響力を持っていたので、男女とも 30 ~ 32% 説明率が上昇した。達成動機も男女とも寄与していた。夫婦としての側面では、個別

Table4
主観的幸福感の階層的重回帰分析結果 (男性)

	step 1	step 2	step 3	step 4
年齢	-.018	-.047	-.030	-.026
学歴	.097 *	.077 *	.073 *	.078
収入満足度	.392 ***	.254 ***	.267 ***	.255 ***
健康	.203 ***	.052	.041	.043
性別役割観		.071 *	.083 *	.070 *
アイデンティティ		.537 ***	.508 ***	.496 ***
達成動機		.102 *	.105 *	.086 *
会話時間			.128 **	
夫家事分担			-.041	
夫育児分担			.033	
意見の一致			.078 *	
人格的				.229 ***
諦め・機能的				.018
子の存在				-.056
規範的				-.085
	$R^2=.218$	$R^2=.520$	$R^2=.570$	$R^2=.581$
	$F=20.985***$	$F=44.876***$	$F=33.519***$	$F=35.447***$

* $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table5
主観的幸福感の階層的重回帰分析結果 (女性)

	step 1	step 2	step 3	step 4
年齢	.023	-.013	-.021	-.006
学歴	.081 *	.048	.055	.066 *
収入満足度	.326 ***	.221 ***	.217 ***	.190 ***
健康	.246 ***	.112 **	.068 *	.087 *
性別役割観		.025	.057	.055
アイデンティティ		.509 ***	.480 ***	.457 ***
達成動機		.191 ***	.188 ***	.190 ***
会話時間			.026	
夫家事分担			.053	
夫育児分担			.059	
意見の一致			.105 **	
人格的				.147 ***
諦め・機能的				-.038
子の存在				-.049
規範的				-.037
	$R^2=.211$	$R^2=.535$	$R^2=.552$	$R^2=.555$
	$F=31.139***$	$F=74.651***$	$F=47.750***$	$F=48.322***$

* $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

の側面と結婚コミットメントを比較すると、結婚コミットメントによって2～6.1%上昇はしたが、個人変数から夫婦関係の変数を加えた場合も1.7～5%であり、個人変数が夫婦関係の変数よりはるかに大きな影響力を有することが明らかとなった。

考察

1. 夫婦の意見の一致

子育て期における夫婦の意見の一致について、どの項目も男性と女性で認識に差はみられなかった。ただ、いずれの項目もばらつきは大きく、男性と女性で平均値に差はみられないが、意見の個人差が大きいことを物語るものといえよう。

一方、他の項目との関連をみると、「子どもの将来」については意見が一致しにくく、「子どもの習い事」では比較的意見が一致するといえよう。夫婦が子どもに習わせたいもの—サッカーか野球か、あるいはバレエか体操か—など、親の夢や期待については比較的夫婦が話し合っことを決めることができるが、子どもの将来については夫婦各々の価値観が関わるだけに、夫婦で意見を一致させることが難しくなるといえるのかもしれない。

なお、夫婦の意見の一致は、女性では夫婦関係である愛情 ($r=.524$) や夫婦関係満足度 ($r=.527$)、また離婚の意思 ($r=-.495$) と関連が高く、精神的健康としての主観的幸福感 ($r=.385$) では関連が若干落ちるが、男性では愛情 ($r=.387$) や夫婦関係満足度 ($r=.369$)、離婚の意思 ($r=-.271$) と、主観的幸福感 ($r=.324$) との関連が同程度であった。ここでもジェンダー差がみられた。

2. 精神的健康を規定する要因

子育て期にある夫婦にとって精神的健康にどの要因が効いているか、特に個人に関わる要因と夫婦関係に関わる要因でどう異なるかをみた。

まず、デモグラフィックな変数として最も効いているのが男女とも収入満足度であった。収入あるいは社会経済的地位はどのライフステージでも個人の精神的健康に影響を及ぼす要因だが、年齢が上がるほど影響は大きくなり、特に高齢期にな

るとその影響は大きく (Larson, 1978; Wynne & Groves, 1995)、なかでも男性で大である (伊藤・相良, 2012a)。本研究の対象者は、小学生の子どもをもつ子育て期の親で、年齢が高齢期に比べれば比較的若い (平均 41 歳) にもかかわらず、収入満足度は男女とも個人の精神的健康に大きな影響を及ぼしていた。また、身体的健康も影響が大きかった。年齢が比較的若い世代では、身体的健康は他の要因が入ってくると精神的健康にあまり影響を及ぼさないのだが、男性ではその影響がなくなるにもかかわらず、女性では最後まで影響がみられた。また、学歴もこの世代では高校/短大・専門学校/大学と数の上でばらつきがあるので、男女とも精神的健康に影響を及ぼす要因になった。

次に、個人としての側面では男女ともアイデンティティが精神的健康に及ぼす影響が非常に大きかった。アイデンティティはもともと青年期の発達課題だが、岡本 (1999; 2002) がいうように、中年期になると一度確立したアイデンティティであっても、「自分のやりたいことはこれでよいのか」「現在の生き方に充実感を持てるか」など、アイデンティティに揺らぎが生じてくる。本研究の対象者は、親密性が問題となる若い成人期ではなく、また、平均寿命の進展により本来は中年期の課題であるジェネラティブティ (Erikson, 1950/1977) は今日では中高年期で多く扱われている (e.g. Cheng, 2009; 丸島・有光, 2007; 相良・伊藤, 2017; 田淵・中川・権藤・小森, 2012)。本研究の対象者は、年齢からいうと中年期のなかでも比較的若く、仕事においても家庭においても最も生産性の高い年齢であるが、同時に身体的な衰えを感じ始める時期でもある。男性ではもちろんのこと、女性においてもアイデンティティが個人の精神的健康に大きな影響を及ぼしていたが、「自分は何者か」「自分のやっていることに納得できるか」という問いは、岡本 (1999; 2002) のいう中年期の揺らぎであり、かつ揺戻しでもあるといえよう。同様に、達成動機も精神的健康に影響を及ぼしていた。相良・伊藤 (印刷中) は中年期女性を対象に、就業形態によってジェネラティブティに及ぼす達成動機の影響をみたが、フルタイムとパートタイムで異なることを明らかにして

いる。ここで扱われているのはやはり自己充實的達成動機で、本研究ではむしろ男性より女性の方が精神的健康への影響が大きかった。さらに、女性ではみられなかったが、男性では性役割観の影響がみられた。それはむしろ伝統的な性役割観が男性の精神的健康を高めるというものであった。

さらに、個人に関わる側面の要因に加えて夫婦関係の要因を追加したが、夫婦関係では精神的健康に及ぼす影響が妻と夫では異なっていた。Appendixの相関でもみたように、夫婦の意見の一致は、女性では結婚の質に関わる要因で、愛情や夫婦関係満足度と高い関連をもつが、男性ではそれらとの関係は主観的幸福感と同程度であった。それでも女性にとって夫婦の意見の一致は、男性に比べると精神的健康に影響する要因といえよう。一方、夫婦のコミュニケーションは夫婦関係を構成する重要な要素であり、結婚満足度の重要な予測因であるが（伊藤，2014）、個人の精神的健康にとってはどうであろうか。会話時間は女性では影響がなく、男性でのみ影響がみられた。これは一見奇妙なことのように思えるが、女性では夫婦の会話が夫婦関係満足度を高め、それを介して精神的健康に影響を及ぼすのに対して、男性では関係満足度にも影響するが、むしろダイレクトに精神的健康に影響するといえる（伊藤・相良・池田，2006）。このことから男性で精神的健康に影響がみられたものと思われる。

最後に、夫婦関係が精神的健康に及ぼす影響をみるために、夫婦関係の個別の要因に代えて結婚コミットメントを投入した。精神的健康に影響がみられたのは男女とも人格的コミットメントのみで、しかも男性の方が影響は大きかった。人格的コミットメントは、愛情（女性 $r=.851$ 、男性 $r=.725$ ）、夫婦関係満足度（女性 $r=.754$ 、男性 $r=.566$ ）、離婚の意思（女性 $r=-.769$ 、男性 $r=-.385$ ）など、結婚の質を表す現代では夫婦にとって最も重要なコミットメントといえるが、その高低は精神的健康にも影響を及ぼしていた。

しかし、これらを個人に関わる側面と夫婦に関わる側面で精神的健康に及ぼす影響をみると、個人に関わる側面の方がはるかに影響は大きかった。しかも女性においてもその影響は非常に大で

あった。小学生の子どもをもつ子育て期の女性で、パートで働く者が45%、専業主婦が34%で、フルタイムはわずか12%に過ぎないにもかかわらず、個人に関わる側面、なかでもアイデンティティが最も強い影響を及ぼしていた。伊藤ら（2004）では、男性と女性の比較だけでなく、同じ女性でも子育て期と中年期でみると、夫婦関係満足度の精神的健康に及ぼす影響が子育て期の方が大きい。しかし、十数年を経た今日では、ジェンダーの違いは相変わらずみられるものの、精神的健康に及ぼす影響は、夫婦に関わる側面より個人に関わる側面の方が大きいといえる。達成動機の影響も強く、今日の女性たちが子育て中であるにもかかわらず、アイデンティティを模索している厳しい状況にあることをうかがうことができるだろう。

本研究の問題点と今後の課題 本研究では、夫婦の意見の一致が個人の精神的健康に及ぼす影響と、個人としての側面と夫婦としての側面が精神的健康に及ぼす影響をみた。しかし、個人としての側面のうちアイデンティティが目的変数である主観的幸福感と相関があまりに高く、実際、アイデンティティという概念が精神的健康に影響しているのか、それとも項目の近似による影響なのか不明であった。前者であれば、時代による影響であり、また、世代による影響と考えられる。

今後の課題として、本研究では夫婦の意見の一致といっても、実際の夫婦、すなわちペア・データでの比較ではなかった。女性と男性では寄せられた回答に200票近い差があり、ペアにすると死票が非常に多くなるが、夫婦で寄せたデータということでバイアスがあるにしても、ペア・データでの比較は必要だろう。今後の課題としたい。

引用文献

- Belsky, J., & Kelly, J. (1994). *The transition to parenthood*. New York: Bantam Doubleday Dell Publishing Group. (安次嶺佳子訳 (1995). *子供をもつと夫婦に何が起こるか*, 草思社.)
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (仁科弥生 (訳) (1977). *幼児期と社会 I*, みすず書房.)
- Cheng, S. T. (2009). *Generativity in later life: Perceived*

- respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. *Journal of Gerontology*, 64B, 45-54.
- Gottman, J., & Silver, N. (1999). *The seven principles for making marriage work*. New York: Brockman. (松浦秀明訳 (2007). 結婚生活を成功させる七つの原則, 第三文明社.)
- 堀野緑, 森和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因, *教育心理学研究*, 39, 308-315.
- 稲葉昭英 (2002). 結婚とディストレス, *社会学評論*, 53, 69-84.
- 稲葉昭英 (2004). 夫婦関係の発達的变化 渡辺秀樹, 稲葉昭英, 嶋崎尚子 (編) 現代家族の構造と変容: 全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析, 東京大学出版会, pp.261-276.
- 伊藤裕子 (2008). 夫婦関係における男性: 男女の共同参画とは 柏木恵子, 高橋恵子 (編) 日本の男性の心理学: もう1つのジェンダー問題, 有斐閣, pp.97-119.
- 伊藤裕子 (2014). 夫婦のコミュニケーション 伊藤裕子, 池田政子, 相良順子 (編) 夫婦関係と心理的健康: 子育て期から高齢期まで, ナカニシヤ出版, pp.80-106.
- 伊藤裕子, 相良順子 (2012a). 定年後の夫婦関係と心理的健康との関係: 現役世代との比較から, *家族心理学研究*, 26, 1-12.
- 伊藤裕子, 相良順子 (2012b). 愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討: 中高年期夫婦を対象に, *心理学研究*, 83, 211-216.
- 伊藤裕子, 相良順子 (2015). 結婚コミットメント尺度の作成: 中高年期夫婦を対象に, *心理学研究*, 86, 42-48.
- 伊藤裕子, 相良順子 (2017). 児童期の子どもをもつ夫婦の結婚コミットメント: 子の存在は離婚を思い止まらせるか, *家族心理学研究*, 30, 101-112.
- 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子 (2004). 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響, *心理学研究*, 75, 435-441.
- 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子 (2006). 夫婦のコミュニケーションと関係満足度, 心理的健康の関連: 子育て期のペア・データの分析, 聖徳大学家族問題相談センター紀要, 4, 51-61.
- 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子, 川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, *心理学研究*, 74, 276-281.
- 小泉智恵, 菅原ますみ, 北村俊則 (2001). 児童を持つ共働き夫婦における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー: 抑うつ, 夫婦関係, 子育てストレスに及ぼす影響, *精神保健研究*, 47, 65-75.
- 厚生労働省 (2009). 離婚に関する統計: 同居期間別にみた離婚, http://www1.mhlw.go.jp/toukei/rikon_8/repo4.html (2017年7月22日参照).
- Larson, R. (1978). Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33, 109-125.
- 丸島令子, 有光興記 (2007). 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討 *心理学研究*, 78, 303-309.
- 中西信男, 佐方哲彦 (1993). EPSI: エリクソン心理社会的段階目録検査 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック, 西村書店, pp.419-431.
- 岡本祐子 (1999). 女性の生涯発達に関する研究の展望と課題 岡本祐子 (編) 女性の生涯発達とアイデンティティ: 個としての発達・かかわりの中での成熟, 北大路書房, pp.1-30.
- 岡本祐子 (2002). 人生の正午: 中年期 岡本祐子, 松下美知子 (編) 新・女性のためのライフサイクル心理学, 福村出版, pp.176-198.
- 相良順子, 伊藤裕子 (2014). 中高年期における Generativity と達成動機との関連, *日本心理学会第78回大会論文集*, 9.
- 相良順子, 伊藤裕子 (2017). 中年期におけるジェネラティビティの構造とジェンダー差, *パーソナリティ研究*, 26, 92-94.
- 相良順子, 伊藤裕子 (印刷中). 中年期の女性のジェネラティビティと達成動機: 就業形態による差, 聖徳大学生涯学習研究所紀要, 16.
- 田渕恵, 中川威, 権藤恭之, 小森昌彦 (2012). 高齢者における短縮版 Generativity 尺度作成と信頼性・妥当性の検討, *厚生の指標*, 59, 1-7.
- 宇都宮博 (2014). 高齢期の夫婦関係と幸福感 柏木恵子, 平木典子 (編) 日本の夫婦: パートナーとやっていく幸せと葛藤, 金子書房, pp.59-78.
- Wynne, R. J., & Groves, D. L. (1995). Life span

approach to understanding coping styles of the elderly.
Education, 115, 448–455.

(2017. 8. 8 受稿, 2017. 10. 17 受理)

Appendix-1 項目間相関

	アイデンティティ	達成動機	性役割観	会話時間	夫家事分担	夫育児分担	意見の一致
アイデンティティ	—	.397 ***	.007	.108	.025	.090	.310 ***
達成動機	.327 ***	—	.036	.099	.119 *	.112	**
性役割観	-.032	.031	—	-.055	-.183 **	-.108	-.058
会話時間	.178 ***	.115 *	.036	—	.164 **	.251 ***	.341 ***
夫家事分担	-.004	.086	-.184 ***	.247 ***	—	.496 ***	-.007
夫育児分担	.127 **	.048	-.122 **	.329 ***	.518 ***	—	.124 *
意見の一致	.375 ***	.190 ***	-.072	.335 ***	.113 *	.332 ***	—
人格的	.299 ***	.215 ***	.059	.439 ***	.209 ***	.335 ***	.472 ***
諦め・機能的	-.190 ***	-.078	.182 ***	-.096 *	.057	-.080	-.200 ***
子の存在	-.146 **	.053	.275 ***	-.075	-.013	-.158 **	-.163 **
規範的	.012	.018	.246 ***	.099 *	.080	.013	-.055
愛情	.315 ***	.244 ***	.015	.527 ***	.255 ***	.395 ***	.524 ***
夫婦関係満足度	.372 ***	.183 ***	-.064	.508 ***	.251 ***	.436 ***	.527 ***
離婚願望	-.315 ***	-.133 **	.025	-.393 ***	-.235 ***	-.399 ***	-.495 ***
主観的幸福感	.655 ***	.405 ***	.006	.153 **	.053	.198 ***	.385 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

上段右男性, 下段左イタリアク体女性

Appendix-2 項目間相関

	人格的	諦め・機能的	子の存在	規範的	愛情	夫婦関係満足度	離婚願望	主観的幸福感
アイデンティティ	.168 **	-.253 ***	-.149 *	-.191 **	.199 **	.160 **	-.085	.665 ***
達成動機	.220 ***	-.183 **	.016	-.041	.231 ***	.149 *	-.082	.350 ***
性役割観	.157 **	.058	.187 **	.189 **	.110	.029	-.044	.077
会話時間	.436 ***	-.025	-.093	.128 *	.492 ***	.410 ***	-.294 ***	.209 ***
夫家事分担	-.054	.052	.100	.003	.023	-.080	-.026	.016
夫育児分担	.128 *	.037	.087	.088	.162 **	.087	-.068	.107
意見の一致	.279 ***	-.166 **	-.212 ***	-.047	.387 ***	.369 ***	-.271 ***	.324 ***
人格的	—	-.025	.077	.354 ***	.725 ***	.566 ***	-.385 ***	.311 ***
諦め・機能的	.006	—	.614 ***	.629 ***	-.152 *	-.238 ***	-.001	-.197 **
子の存在	.003	.634 ***	—	.604 ***	-.156 **	-.203 **	.070	-.159 **
規範的	.300	.524 ***	.534 ***	—	.179 **	.086	-.149 *	.138 *
愛情	.851 ***	-.147 **	-.108 *	.197 ***	—	.625 ***	.429 ***	.323 ***
夫婦関係満足度	.754 ***	-.179 ***	-.186 ***	.139 **	.801 ***	—	-.541 ***	.261 ***
離婚願望	-.769 ***	.169 ***	.152 **	-.178 **	-.745 ***	-.774 ***	—	-.208 ***
主観的幸福感	.368 ***	-.215 ***	-.158 **	-.018	.404 ***	.483 ***	-.410 ***	—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

上段右男性, 下段左イタリアク体女性